



首都のアスタナ市内では、高層ビルの建設が進んでおり、発展の様子がみてとれる。

知られざる カザフスタンとの交流

駐カザフスタン大使

原田有造

はらだ ゆうぞう

一九七二年東京大学卒業、大蔵省入省、国際金融局審議官、世界銀行理事、大和総研常務理事・経営戦略研究所長等を経て、二〇一〇年九月より現職。

カザフスタンは、ユーラシア大陸の真ん中に位置し、世界第九位の面積（日本の七倍ほど）を持つ中央アジアの大國です。日本との関係が薄いと感じられる方も多いと思いますが、過去には第二次世界大戦後にソ連により抑留された人々の内、五万人以上の日本人がカザフスタンに来ており、現在でも日本人抑留者により建設された家屋等がカザフスタンの各地で利用されています。最近カザフスタンの

ボラシヤク大学の学長により日本人抑留者に関する大著が発表されており、日本との関係を確認する良い機会になっています。

カザフスタンは、核兵器の被害という点でも日本と深い繋がりを有しています。カザフスタンのセミパラチンスク（現セメイ市）の核実験場ではソ連時代に地上・地下で四五六回の核実験が行われたこともあり、核兵器に対する

忌避感情は非常に強いものがあります。独立後核実験場を閉鎖し、核の不拡散等に対しても日本と共に積極的な行動を取っています。日本は一九九九年にセミパラチンスク支援東京国際会議を国連開発計画（UNDP）と共催し国際社会の注意を喚起するとともに、セメイ市に平和友好橋を建設したほか、医療支援等を行っています。

地球規模の環境問題という点で、アラル海に触れないわけにはいきません。一九六〇年代に世界第四位の面積を誇ったアラル海は、水資源の濫用により枯渇が進み、カザフスタン領域の小海とウズベキスタン領域の大海の二つに縮小し、住民の健康被害、植生の変化等、かつてないほどの規模の変化が起きています。この問題に関しては、元京都大学教授の石田紀郎氏が国際的な研究を行っています。また、日本政府も草の根・人間の安全保障無償資金協力を行っています。

本年六月に宇宙飛行士の古川聡氏が、宇宙ステーションに長期滞在するため、カザフスタンのバイコヌール基地から宇宙に飛び立ったことを覚えていらっしやる方も多いと思います。今後の宇宙開発の分野でも日本を含む国際的な協力がカザフスタンとの間で期待されます。

経済的には、有名なカスピ海北岸の石油・天然ガス資源

を始め、石炭、鉄鉱石、チタン、クロム、ウラン、レアアースと、存在しない資源を探すほうが難しいほどの資源大国です。日本との関係では、最近特にウラン、レアアースが注目され、日本企業の大きな投資案件が進んでいます。カザフスタン政府は、資源だけに依存しない経済づくりを目指しており、製造業、ハイテク分野での日本からの投資を望んでいます。日本の経済界も成長著しいカザフスタンに熱い視線を向け始めています。このような背景の下、日本は毎年カザフスタンとの間で経済官民合同協議会を開催し、幅広い分野での投資、貿易関係の拡充について活発な議論を行い、今後さらなる関係の発展を目指しています。

なお、首都のアスタナは一九九七年に遷都された人口七〇万人の新しい首都ですが、街のグラウンドデザインは故黒川紀章氏が担当したものですし、アスタナ国際空港や、アスタナ市の上下水道は日本の円借款で整備されています。また、国内に二カ所あるカザフスタン日本人材開発センターでは、多くの学生・社会人が日本語を勉強しており、日本の経済・起業に関するビジネスセミナーも年に数回開催されています。両国関係の一層の発展が期待されています。■